

資料

ケネーの發展——アグラリアニスムより自由へ

手塚壽郎

此一篇は一つの *esquisse* に過ぎない。編輯主任の厚意によつて、待ち得らるべき最後の日まで待つていたといたのであつたが、*esquisser* することゝ了へることが出来なかつた。將來のいつの日か、筆硯を新にして同じ問題を再び取扱ふことによつて、學者によつての嚴正なる叱正を僥倖となしたい。

今を去る百五十年の昔、アダム・スミスはフイデオクラット(註一)のシステムを指して *The Agricultural System* と呼んだ。(註二)これによつて云はれたる意味は、フイデオクラットが農業のみを生

ケネーの發展——アグラリアニスムより自由へ

産的なりとなしつゝ、農業を著しく重要視したと云ふにある。然るに久しくも一世紀の間——其間たとひ Daire によつて敬意を表せられたとは云ひ——殆んど全く忘れられて、ファイデオクラットが漸く異國の學者によつて其學說史上に於ける意義を認めらるゝに至るや、其システムは自然權のシステム The System of Natural Liberty なりと云はるゝに至つた。(註三)他の言葉を用ひて云へば、トルシー教授が「アダム・スミスはファイデオクラットの學說を農業のシステムと呼んだ。これはファイデオクラットのシステムの特質を最も正確に言ひ表したものである」(註四)と云へるが如きは誤であつて、ケネーのシステムは農業を基礎とするシステムではなく、却てケネーこそ先驗的自由主義の權輿なりとせらるゝに至つたのである。

(註一) ファイデオクラシーなる文字を最初に用ひた人は誰であつたか。此小さき問題に就ての學者の解答は一致してゐない。山口正太郎教授は此文字を初めて用ひた人はデュボンではないと考へられてゐるようである。勿論教授はこれを積極的に云はれてゐるわけではないが、左の如く云はれてゐるから、かような解答をもつてゐられることと推察される。

「フキシオクラシーなる名稱が初めて用ひられたのは、此派の有力なる研究家の一人 Schelle によればデュボンによるとある。オンケンには之に反對し、更に半年以前、即ち一七六七年四月發行の Ephéméride 誌上二二頁に Abbé Baudeau が「諸政治の原理」なる論文にファイデオクラシーの名稱を使用してゐることを述べ、更に又「ファイデオクラシー」と題するケネーの多くの論文を編輯した單行本の第一卷と第二卷との合本が、一七六八年刊行とあるが、既に前年の十一月に出版されてゐた事情を述べ、以てデュボンが此名稱の創唱者なることを否定してゐる。」(經論二六ノ二、一一一頁)

けれ共此「フィザオクラシー」なる論文集を編輯し出版したのは實はヂュボンであつた。だから反證のない限り、此名稱を初めて用ひたのはヂュボンであつたと云ふも差支はない筈である。勿論此書物の出版前にケネーや弟子らが共に集りて會話を交へた事實が屢々あつたから、口頭に於ては誰が最初に此語を用ひたかは明ではない。

Ephéméride の一七六七年四月號一二二頁にボードーによつて此語が用ひられてゐることは、オンケンが云ふ通りである。然し私が證索したところでは、Ephéméride の一七六七年の三月號に「フィザオクラシー」の出版廣告が出てゐる。ヂュボンの編輯せる「フィザオクラシー」とあるから、私はオンケンの如くには考へない。私は Schelle の如く、フィザオクラシーの語を初めて用ひた人はヂュボンであると信ずる。

(註二) A. Smith, *Wealth of Nations*, Book IV, *Chapt. IX.*

(註三) 例へばイングラムの如き。此らの學者は或ひはケネーと弟子とを含ましたシステムを云つてゐるのかも知れぬ。然りとすれば此らの學者はケネーと弟子とを混同したとの批難を免れ難い。

(註四) Truchy, *Le libéralisme économique dans les oeuvres de Quesnay*, *Rev. d'écon. pol.*, 1899, p. 931.

私は此小篇に於て此見方が正しからざるべきを證明し、ケネーの思想の重心は農業に於ける収益を増加せんとすることにあつたのであり、其自由主義——こゝには主として自由貿易主義を問題とする——は此手段として出でたるに過ぎざるものなるを證明しようと思ふ。換言すれば此稿に於ける私の目的はケネーの自由貿易主義が農業の興隆を計らんとする實用上の目的に出でしものであり、彼の自然權はこの目的に附け加へられたる紛飾に過ぎないことを證明せんとするにある。

多くの、殊に日本の學說史家はフイデオクラット中の唯一の哲學者はケネーなりとの理由を以てフイデオクラットを論ずるに概ねケネーを以てする。もとより彼らは何れもケネーと其弟子との間に學說の相異あることを説くを怠らない。然るに實際に彼らがフイデオクラットを取扱ふ場合にはケネーを論じ乍ら、ケネーと其弟子とを混同し、己の立論に便利なるものゝみ或ひはケネーより或ひは其弟子より引用する。

私は今私の證明を嚴密にケネーに限るのである。何故にかゝる限定を設けざるべからざるか、ケネーと其弟子とを區別せざるべからざるか。此らは夙にオンケンが明にせる事項である。(註一) エックスIIマルセイユ大學のソーベール・ヂールダン教授また此區別の必要を特に注意してゐる。教授曰く「ケネーと其弟子との見解は多數の問題に就て相異してゐる。此相異は彼らの著作を比較して後觀取し得るのみでなく、ヂュボンが公にした其師の著作中(ラ・フイデオクラシー、一七六七)に其師の意見と弟子の意見とが一致しない二つの部分を省いてゐる事實に明に現れてゐる。加之ケネーと其弟子との此區別は對外貿易に關する問題に關し、特に必要である。對外貿易に就て「Laissez-faire, laissez-passer」の一步も譲ることなき主張者たりしはケネーの弟子達である。此有名なる句はケネーの著作には只一度現るゝのみであり、それも引用の形式に於てである。ケネーは自

由貿易を原理として考へたのでは決してない。もとより彼の著作の全體から引離して或句のみをわざ／＼引出して來るならば、右に云ふ所と反對の事實を信ぜしむべきものがないではない。然しケネーの思想の全體を知り且つ此らの句の占むる地位を了解するならば、此らの句は其特別なる意味を失はざるを得ない」と。(註二)更にまた私はトルシー教授の言を聽くことが出来る。「餘りに一般的なる評價をなすを避けようではないか。ケネーの弟子ら、例へばメルシエ・ド・ラ・リヴァイエール、ボードーに就てならば正確なことも、師に就てならば遙かに正確ならざるものである」と。(註三)

(註一) Oncken, *Oeuvres de Quesnay*, Introduction, pp. XXI—XXII.

(註二) Sauvaire-Jourdan, *Isaac de Bacalan*, p. 21.

(註三) Truchy, *Le Libéralisme économique dans les oeuvres de Quesnay*, *Revue d'économie politique*, 1899, p. 927.

さはれ私は、晩年のケネーが著しく其弟子らと——此等弟子等のシステムも果して先驗的自由主義のシステムであつたか否かは問題たり得るであらう——思想の傾向を同うするに至つたことを認めない者ではない。だからもしケネーのうちに先驗的自由主義を認めやうとする學者が、自ら問題とする所のケネーは晩年のケネーであると云ふならば、私は之に對つて強い抗辯の言葉を持ち得ない。だがこの事實其こと自體が既に、此ケネーの先驗的自由主義をプラグマチックな目的より出で

たる自由主義の潤色に過ぎないと見ることを裏書するものである。

私の證明は先づケネーのうちにメルカンチリストの一面が残つてゐたことに始まる。即ちメルカンチリストの如く貨幣と富とを殆んど同一に見るが如き謬見からケネーは逃れ得たにしても、富を有用なる物質に過ぎずと見る見方にまで徹底してゐなかつたことに、私は私の證明を始むるであらう。更に言ひ換ふれば、ケネーは富を貨幣にて表された所の金額の總體と見、メルカンチリスト的考を全く脱却してゐなかつたことを示すのを以て、私の證明は始めらるゝてあらう。次にケネーに於て自由貿易主義の有益なることの證明が、此主義が農業の利益に導くことに力點が置かれたことを證明する。同時に私は、先驗的自由主義に必然的に結び付かねばならぬと思はるゝ二三の重要な事柄に就て、ケネーが自由主義に徹底してゐなかつたことを證明するによつて、彼の自由貿易主義が先驗的でなかつたことの反證とする。最後に私は彼の哲學思想の傾向を明にし、かゝるプラグマチックな自由主義が出て來ねばならぬ道行を明にする。

二

コルベールに於て最高潮に達したメルカンチリズムはムロンやデュトーを経て徐々に崩潰の過程

を辿り始め、遂にケネーによつて此過程は完成せられたと云はれ、メルカンチリストによつて貨幣其ものであるとまで考へられてゐた富はケネーに至つて有用な物質に過ぎぬと考へられるやうになつたと云はれる。げに我々はケネーの論文“Grains”のうちに、有名なる次の一句「一國の富は Richesses pécuniaires の量によつて計られない。ペルーの寶庫を享受したエスバニヤは物質に缺乏して常に衰弱してゐた。だから一國の富を決定するものは Richesses pécuniaires ではない。……一國を維持するためには眞實の富を必要とする。此富は常に再生し、之を享樂し、之を獲得し、生命を維持するために常に人々によつて求められ、代價を支拂はるゝものである。」を見出すことが出来る。(註一)同様の意味をもつ句を彼の著作の到るところに見出すことが出来る。彼が純粹のメルカンチリストでなかつたことは一點の疑を容れない。だが彼は非メルカンチリストたることに徹底してゐたであらうか。「價值の概念はケネーに於ては物質の生産なる概念にしか結び付いてゐない。彼は生産を物即ち物質的存在物の作出と考へる。彼に於ては生産は既に存在する物を變形することに他ならない」とは、ケネーの自由貿易主義の先驗性を否定せるトルシー教授の解釋であるが、(註二)ケネーはそれほど徹底してメルカンチリズムを蟬脱してゐたであらうか。

(註一) Quesnay, Oeuvres, pp. 238—9.

ケネーの發展——アグラリアニスムより自由へ

(註二) Truchy, L' article cité, p. 934.

右に引用した句によつて、ケネーが Richesses pécuniaires を富と考へてゐなかつたことは明であるが、然しこのことは直ちに彼が富を物質と考へたとの證明にはならない。彼が物質であると考へたものは Biens であつて、富ではない。このことをケネーは明言してゐる。「所有者が賣ることの出来ない富や、求めようとしてゐる買手のない富は賣れるものではない、即ち Commerçables ではない。故に總ての Biens が賣買せられべき富であるのではない。我々が呼吸する空氣、我々が小川に汲み得る水、其他餘分に豊富に存在して總ての人々に共通に與へられてゐる Biens や富は賣買される富ではない。それらは Biens ではあるが、實は富ではない。

「不動産の如く永久不變の性質をもつ Biens は賣買される富とは見られ難い。これらを賣るときには勿論價値はあり得るが、然し此價値を決定し維持せしむるものは實は此らから生産せられて賣買せられ得る生産物なのである。而して生産物は人間の欲望を充すに必要な財であつても、賣買せられ得ないものであれば、有利な富とは見られ得ないのである。」(註)

(註) Quesnay, Hommes, Rev. d'histoire des doctrines économiques et Sociales, 1908, p. 23.

此引用によつて明であるようにケネーは財と富とを區別し、使用價値をもつ物を財とし、賣買の

價值 *Valeur vénale* をもつものゝみを富としてゐる。そしてケネーによれば此富の賣買の價值は價格となつて現はれる。「價格とは賣買せらるゝ富の賣買の價值である。だから賣買せらるゝ富の價格と其使用價值 *Valeur usuelle* とを混同してはならない。此ら二つの價值は屢々相一致しない。使用價值は常に同一である。それは、人の欲望に對する關係によつて、人間に對し意義をもつ。然るに價格は人間の意志とは獨立な、變轉極りなき諸々の原因によつて變化する。價格は人間の欲望によつて定まるものではない。それは任意の價值ではなく、商人の間の契約 *Convention* によつて定まるものでもない。」使用價值と賣買價值とはかく性質的に相異し、相一致しないものであるが、更に量的にも一致しない。「ダイヤモンドは賣買される商品のうちでは最も有用でない物であるが、食料品の賣買價值より遙かに大なる賣買價值をもつ。なぜかと云ふに極端な凶作の場合を除けば、食料品の賣買の價值はダイヤモンドの賣買價值より遙かに少いからである。」「とに角賣買せらるゝ總ての富の價值は價格となつてしか現はれない。故に此らの富の収益は使用價值から來るのではない。同じ分量の小麥も、同じ分量の薄紗も、之を賣る者にとつてと、之を享樂しようとする者にとつてと同一の富ではない。賣買せらるゝ富は、價格をもつが故に富なのである。故に一國の富裕と繁榮とを判斷すべきは、賣買せらるゝ物の豊富なることゝ、それらの價格が常に高いことゝに

よつてである。」(註)

(註) Quesnay, Hommes, Rev. de l'histoire des doctrines, 1908, p. 24.

かようにケネーは富を使用價值のみをもつ物質より明に區別し、一國の繁榮は使用價值ある物の分量如何によつて定まるものではなく、富即ち賣買の價值の分量によつて定まるものであると考へてゐる。多くの經濟學說史家の云ふが如く、彼が富を物質と考へてゐたとは思はれない。少くとも右の引用句を含む所の Hommes には富の唯物的見方は少しも含まれてゐない。それと同時に此 Hommes に於てもケネーは富と貨幣とを同一視するメルカントリス特的見解を示してゐない。このことは Hommes のうちから左の句を引用するによつて裏書せられるであらうと思ふ。「貨幣又は金銀はそれらが貨幣である限りに於ては使用價值を有する富ではない。なぜなら貨幣は云はゞ商業の用具に過ぎないからである。貨幣は損敗しない。十年、千年、萬年の間賣買に用ひられても消滅せず、商業に役立つ。それ故に僅かの貨幣があれば、賣買せらるゝ富の賣買を繼續して行くには充分である。それは賣買に當つて賣買せらるゝ富の價格を指示するにしか役立たず、或場合には商業に觀念上だけで役立つに過ぎないものである。貨幣は、其れが表章してゐる記號によつて保證せられてゐれば甚だ便利であり、此保證あるがために進みては、富と等しい額の貨幣の仲介なくして不斷

の商業を行はしむるに役立つようになる。故に一國の繁榮は貨幣の量にあるのでなくして、賣買せらるゝ富の豊富なことゝ、其れらの價格が高いことゝにあるのである。……反對に一國が貧弱であるのは、通俗に信ぜらるゝように其國に貨幣が乏しいからではない。賣買せらるゝ富がないからである、又は此國で富の價格が甚だ低廉であるからである。」(註)

(註) Quesnay, L' article cité, p. 25.

これだけの證據を示したことによつて、ケネーが富を物質と考へてゐなかつたことは明にし得られたと思はれる。勿論トルシー教授が指示した如く、富を物質と解したと思はしむべき句がケネーのうちに無いわけではない。「市民の階級の區別の基礎をなす生産の概念は物理的限界のうちに限られてゐる。此限界はまさしく實在の限界に一致してはゐるが、普通の言葉に於て用ひられてゐる曖昧な表現に一致してはゐない」と。(註一)だが此のような主張は甚だ稀にしかケネーのうちに現はれてゐないばかりでなく、かゝる斷言とは根本的に矛盾する主張が彼によつてしばしば繰り返されてゐることを忘れてはならない。「La non-valeur avec l'abondance n'est point richesse. Abondance et non-valeur n'est pas richesse.」は、(註二)ケネーの晩年の著作にも幾度か現はれてゐる句なのであるが、もしケネーが富を有用なる物質であると解してゐたとしたら、此句の意味は全く不可解であ

ると云はねばならぬ。富が物であるとしたら、物が豊富であればあるほど富が多いと云はなければならぬ、たとひそれが *non-valeur* であつても、富ではないとは云ひ得ないであらう。富が賣買の價值と同一であると考えられたとすれば此句は充分に明らかな意味をもつことが出来る。勿論私は、右の引用句の後に “*La cherté avec pénurie est misère.*” “*Disette et cherté est misère.*” 等の句が加へられてゐるのを忘れてゐるのではない。もし私が解釋するように價值が富であるとしたら、たとひ物質の量が少くても其價值が無限に大であるならば、價值の合計は無限大となつて、富が豊富となることも不可能ではないかも知れない。けれども不可能でないといふことは、極端な例外的な場合に過ぎない。多くの場合に於ては價值が相當に大であり、物質の量も又相當に大である場合に價值の合計は最大を示すであらう。私には、ケネーが此句に於ては例外的な場合を考へてゐたのではなく、比較的によくあり得べき場合を考へてゐたのであると思はれるのである。此句をかく解釋することは多少の無理を含むことは争はれ難いが、“*La non-valeur avec l'abondance n'est point richesse.*” を曲げて、富を物質と見たと解釋するよりは遙かに無難であらう。村松恒一郎教授は、右の句に續く “*L'abondance et cherté est opulence.*” を引用してケネーは富を二元的に見てゐた、物質であると同時に價值であるとしてゐたと解釋せられる。(註)三私は、ケネーが此句によりて、物

が豊富であり其價格が相當に高ければ其價值合計は極大に達する、從て繁榮がある即ち富が最大であることを、意味せしめたものであると解釋する。村松教授の解釋は、「賣買せらるゝ富は其れが價格をもつと云ふ理由でしか富となることが出来ない。だから一國の富裕と繁榮とを判斷すべきは、其國の賣買せらるゝ物の豊富と其價格の常に高いことゝに依つてゝある」(註四)の句と相容れないと思ふ。

(註一) Quesnay, Oeuvres, p. 528.

(註二) Ibid., p. 335.

(註三) 村松恒一耶教授、フイナオクラツト經濟學に顯るゝ二つの思想動機、商學研究第四卷第三號七四六頁以下。

(註四) Quesnay, L' article cié, p. 24.

以上示したる證明によつてケネーに於ける富は價值であることがほゞ明になつたと思ふ。然し富が價值であると云つたゞけでは充分にケネーの思想を明にし盡したものだとは云ひ得ない。なぜかと云ふにテルミノロヂーの不注意から、彼は右のような價值合計を富と呼ぶと同時に純生産物をもまた富と呼んでゐるからである。否實は、ケネーが此純生産物をこそ眞の富であると考へたことは衆知の事實である。けれ共私が見た所では此純生産物も物質ではないのである。それは右に明にせられた如うな富から *Avances* の額を差引ける殘であつて、從て價值の控除殘に過ぎない。それは

物質ではあり得ない。ケネーは此純生産物をまた収入 *Revenu* と呼んでゐるが、(地主がその土地から得る利益即ち収入は、其れ故に國家の眞の富である、王の富である、臣民の富である、國家の必要に應じ得る富である)(註一)ケネーは此収入が價値であつて物質に非ることを明言してゐる。

「収入は土地の生産物の價格によつてしか評價し得られない。収入を構成するものは生産物ではない。生産物は頗る豊富であり得ても、収入を生じ得ない場合がある。何となれば、此らの生産物が此らの生産に要する基調價格より高く賣れないとしたら、それらは耕作者の損失になつて仕舞ふ。だから生産物は、其らの價格が其らの生産に必要な費用を超過するのでなければ、収入を生じない。」(註二)

(註一) Quesnay, *Impôts, Rev. d'histoire des doctrines économiques*, 1908, p. 144.

(註二) Quesnay, *Hommes, Rev. d'histoire des doctrines*, 1908, p. 34.

尙ケネーは、小麥の貿易が自由であるかにより収入が如何なる相異を生ずるかを佛蘭西と英吉利との例を以て示してゐるが、此場合にも收穫の物量如何は少しも問題とせられてゐない。

Etat des prix du bled en France, ou l'

exportation des grains est defendue.

| années | septiers par arpent | prix du septier | total par arpent | Frais taille et fermage par arpent chaque année |
|------------|------------------------|--------------------|---------------------|--|
| abondantes | 7 | 10 £ | 70 £ | |
| bonnes | 6 | 12 | 72 | |
| médiocres | 5 | 15 | 75 | 74 £ |
| faibles | 4 | 20 | 80 | |
| mauvaises | 3 | 30 | 90 | |
| | 25 | 87 £ | 387 £ | 370 £ |

Etat des prix des Bleds conformément
aux effets de l'exportation en Angleterre.

| années | septiers par arpent | prix du septier | total par arpent | prix taille et fermage par arpent |
|------------|------------------------|--------------------|---------------------|---|
| abondantes | 7 | 16 £ | 112 £ | |

ケネーの發展——アグラリアニスムより自由へ

| | | | | |
|-----------|----|------|-------|------|
| bonnes | 6 | 17 | 120 £ | 74 £ |
| médiocres | 5 | 18 | 102 | |
| faibles | 4 | 19 | 90 | |
| mauvaises | 3 | 20 | 60 | |
| | 25 | 90 £ | 440 £ | |

この二表は穀物の自由貿易の得失を明にする目的を以てケネーが *Hommes* 中に(註)示したるものである。これに據つて見ると、貿易の自由なる英國に於ても自由ならざる佛蘭西に於ても生産せらるゝ小麥の物量は五ヶ年を合計して一 *arpent* に付二十五 *septiers* と假定せられ、何らの差異が設けられてゐない。相異はたゞ價格の點にのみ現はれてゐる。同一量の生産物が五ヶ年間を通じて如何に價額即ち収入を實現するか(ケネーは此例に於ては生産費を同一と假定してゐるから、價額の相異は必然的に収入の差を示す)のみに相異が示されてゐる。

(註) Quesnay, *Hommes*, *Revue citée*, 1908, pp. 31—32.

Cf. Perillaud, *La liberté économique dans Quesnay*, *thèse*, Poitiers, pp. 57—8.

けれ共ケネーに於て農業のみが純生産物、収入を生ずるものであり、商工業は純生産物を生ぜず

と考へらるゝを、我々は如何に考ふべきであるか。多くの史家によれば、ケネーは純生産物を物質と見たるが故に、商工業は之を作り出すことなしと考へたと云ふ。私は、商工業は價值の餘剰を生ぜしめざるが故に収入を生ぜしめない^(註一)とケネーが考へたと信ずる。ケネーは、「農業の労働は諸費用を償ひ、耕作の労働を支拂ひ、耕作者に利益を得せしめ、且つ土地の収入を生ぜしめる。工業の製作品を購ふ者は費用を支拂ひ、労働を支拂ひ、商人の利益をも支拂ふ。然し此らの製作品はそれ以上に何らの収入を得せしめない^(註二)」と云ひ、物質を作り出さぬが故に商工業が収入を生ぜしめないとは云つてゐない。費せる以上の價值を作らぬが故に商工業は収入を作らぬと云つてゐるだけである。また農業にしても總ての農業が収入を生ずるのではないことをケネーは明言してゐる。

「自分の労働によつて土地から、例へば馬鈴薯、黒麥の如き價值のない物しか收めない貧乏人、即ち自ら食つて行くだけで何もかも買はず何物も賣らないような人はたゞ自分のためにだけ働いてゐる人である。彼の生活は貧乏なものである。彼と彼が耕作する土地とは國家に何ものも齎らさな^い。」^(註二)またケネーは云ふ、「利益や充分な賃銀が得られなくとも、田舎の人の或一部は、多額の費用や長い期間にわたりての労働を必要とせずして生産することの出来る物を、生活のために生産する。かような生産物では百姓は長い間收穫を待つてゐる必要がない。然し此らの人々、此らの生

産物、此らの生産物が生れる土地は何れも國家にとつてねうちの無いものである。土地から収入を引出し得るためには田舎の労働が労働者に支拂はるゝ賃銀のほかに純生産物を生ぜねばならぬ」と。(註三)

(註一) Quesnay, *Oeuvres*, p. 233.

(註二) *Ibid.*, p. 235.

(註三) *Ibid.*, p. 235.

だがさうだとしたら、ケネーが商工業には収入が生じないと云ふのは如何なる意味であらうか。私はポアチエ大學の教授 Savatier と共にそれを次の如く解釋する。「フイデオクラットのシステム全體は、競争の結果として總ての商品が消費者に對して生産費で賣られねばならぬようになる」と云ふ原理の上に立てられてゐる。競争の結果として最後の消費者が支拂ふ價格は、フイデオクラットによれば、此らの商品を引渡し又は變形する人々に對し、其生活に必要な賃銀と費用としか得るを許さしめない。……故に商工者を経ることによつて土地の生産物の價值は増加するけれ共、此増加した部分は此ら商工業者の費用と賃銀から成り立つてゐるに過ぎない。然るに農業では事情が全く異つてゐる。農業も商業や工業と同じく商品を賣つて其費用を支拂はねばならない。商品を賣る

ことによつて農業者は農業投資の利子、耕作者の賃銀、經營の諸費用、耕作の繼續維持の費用投資償却の費用を支拂ふことが出来る。農業生産物の價值が支出したゞけの價值に過ぎず、これを超えて何ものも生じないとするとなれば農業は商業と異なる所がない。然しさうではない。農業の生産物の價值は費用の全部を超過し、此以上に純生産物と稱せらるゝ餘剰を示し、これが地代の形態をとつて地主の収入となる。農業と商工業との主たる差異は此點にある。商工業は商品の價值によつて費用を支拂ふけれ共、それ以上に價值の餘剰を生むことが出来ない。農業は其費用以上に純生産物を生ぜしめる。」(註)

(註) R. Savatier, *La théorie du commerce chez les physiocrates*, pp. 83—4.

けれども純生産物が價值であるとしたら、純生産物が人口を養ふとは如何なる意味であるか。一般に知らるゝが如く、ケネーのうちには、彼がポピラシヨニストにあらざるかを思はしめるような句がある。例へば彼は、十七世紀の中頃より十八世紀の中頃の間、戦争のために佛蘭西が蒙つた人口の損害を述べ、且つ此人口の減退は農業の不振を導くことを述べてゐる。(註) また彼は人の數が一國に於て三分の一を減ずれば、富は三分の二を減ずるであらうと云ふ。もし尙二三百萬の人を失ふならば、フランスに現存する富は激減するであらうと彼は云ふ。また、もし百年前の人口が半分

になつたとしたら、佛蘭西は荒廢に歸したであらうと云ふ。かくてケネーによれば土地廣大にして肥沃なる國にては人口が多ければ多い程富があるわけである。（註二）然しケネーに於ては此種の意味をもつ句の數はポピラシヨニストの反對者を思はしむべき句の數に比較して遙かに少い。ケネーの本意は人口が純生産物によつて決定せらるゝと云ふにある。彼は彼の著作の到るところに云つてゐる、「田舎の住民は富が農業を支配し、農業が富を増加する程度に比例して増加する。一國の人口は國民の純収入が増加するに伴つて増加する。人口の増加は全く富の増加と人間の使役と富の用途に依存する。人口は安樂に生活し得る所に増加する。人口の繁殖を刺激すべき安易を得るには先づ以て富を必要とする。収入が増加したときには其國は更に人口を引き寄せる。故に田舎の人口を増加せんと欲せば、人口の増加は先づ以て富の増加に依存するものであり、人は富の援助によつてしか増加しないものであることを忘れず、人口の増殖を念とせず、富の増加に意を注がねばならぬ」と。（註三）

（註一） Quesnay, *Hommes*, *Revue d'hist. des doctrines*, 1908, pp. 7—8.

（註二） Quesnay, *Oeuvres*, pp. 206 et 245—6.

（註三） *Ibid.*, pp. 187, 247, 269.

かくケネーによれば純生産物によつて人口は養はれる。けれども純生物が價值であるとしたら、

純生産物が人口を養ふとは如何なる意味であるか。物質が人口を養ふと云ふならば、それは容易に理解し得ることであり、價值が人口を養ふとケネーが考へたと思はれ難いと云ふ結論に導き得るかも知れない。だが價值が人口を養ふと云ふことがケネーの人口論の特色であることは、佛蘭西學界の異才ランドリー代議士が充分に明にしてゐる所である。「Wallace (古イ) やマルサスの考では農業は特に人口に重大なる關係をもつてゐるのであるが、このことあるは農業が生活資料を作り出すからなのである。このような考を表明してゐる若干の句、即ち農業の特性を物財を作るにありとし、此特性を人口に結び付けてゐる若干のテキストをケネーのうちに見出すことは不可能ではない。彼は或ところで、工業及び商業の材料を給するものは農業であり、農業のみが人間の生活資料を作り出す根源をなすのであつて、従て人々が工業生産物のみを製造するに従事してゐる國では人々は此らの商品によつて生活し得られない、と云つてゐる。然しケネーが此見方にたつてゐる場合は稀であり、且つ重大な箇所^に於ては^はない。ケネーが普通に且つ主に眼中に置いてゐるのは、人口の諸々の労働によつて與へられる結果に就てである。それは此らの労働が物財を作るか否かに就ては^はなくして、此らの労働が價值を作るか否かに就てである。……ケネーが常に念頭に置けるは生産物の價值である。此考慮は彼が農業の成果を考へる場合に特によく現れてゐる。彼は絶えず繰

り返して、農業に於て重大なのは生産せられた財の量ではなくして、其らの價值即ち價格であると云つてゐる。」(註一)そしてランドリー代議士はケネーの此思想の説明をケネーに於ける純生産物と *Produit brut* との並行論に求める。「或例外的な句を除いては、ケネーは純生産物と純生産物との背反——かく言ひ得るとしたら——あるべきことの可能を承認しない。ケネーによれば、純生産物がより多ければ、總純生産物も同時に、より多いのである。小農によりて耕作せらるゝ土地は、より多くの人とより多くの費用とを要し、利益は極めて少い。土地の耕作のためにかように人を拙く使ふは人口の多い國に於てさへ損害を生ぜしむる。なぜかと云ふに一國の人口が多ければ多いほど土地から益々多くの生産物を引き出す必要があるからである。のみならず勞力を節約するに役立つ手段を論じてゐる場合にも、ケネーは、此勞力の節約が生産物の少しの減少をも伴はないと云ふ假定に立ち、且つ他の假定をとり得ないとの確信を示してゐる。またケネーは書いてゐるが、それによると、我々は、費用が少くて生産物と利益のより多くが得られるような耕作の方法を選ばねばならない。農業に於てのみならず、總ての生産物に就ても同様であつて、我々は出來得る限り生産額を増加し、費用を減ぜねばならない。」(註二)

(註一) Landry, *Les idées de Quesnay sur la population*, *Revue d'histoire des doctrines économiques*, 1909, pp. 53—4.

(註二) Ibid., pp. 59—60.

こゝでランドリー代議士は不注意にも *Produit brut* なる文字を用ひ、それと純生産物の量とに比例の存在をケネーのうちに認めようとしてゐるのである。即ち代議士は此文字によりて有形の物質を意味せしめようとしてゐる。けれ共ケネーに於て *Produit net* が價值即ち價額の一部であるとしたり、*Produit brut* は云ふまでもなく價值即ち價額でなければならぬ。純生産物は總生産物より *avances primitives* 及び *avances foncières* を控除せる殘額なのであるから、*Produit brut* も貨幣で表された額でなければならぬ。ランドリー代議士はフランスの經濟學者中ノガロー代議士にも比肩すべき鋭い頭腦の所有者であつて、總生産物を物質と考へながら、純生産物を價值と考ふるが如き見易き誤を犯すべきことは容易に考へられない。ランドリーがこゝで *Produit brut* と云つてゐるのは純生産物を含んでゐるものではなく、單に *Produit brut* (フィデオクラットが云ふ所の) や *Produit net* をあらしむる所の物質的條件たる物を意味するに過ぎない。故にランドリー教授がなせる解釋はケネーに於ける純生産物と物質の並行觀の上に立てられてゐる。然らばランドリーの解釋は自家撞著ではなからうか。私が知れる限りに於てランドリー代議士は、ケネーに於ける富を價值即ち價格と解釋する極めて少數なる學者(此らの學者中に算へらるべき者として私が知つてゐる

のは、代議士のほかに巴里大學のデツシヤン教授、(註一)ポアチエ大學のサヴァチエ教授(註二)だけである。)中の一人である。而してケネーに於ける富を價值と解釋する有力なる證據として代議士が我らに示す所のものは、“La cherté avec pénurie est misère; mais la non-valeur avec l'abondance n'est point richesse : c'est l'abondance avec cherté qui est opulence”の一句でもある。(註三)此うちの“C'est l'abondance avec cherté qui est opulence.”に於ける abundance は決して最大の物量を意味してゐるのではない。“Mais la non-valeur avec l'abondance n'est point richesse.”中の abundance のみ最大の物量を意味してゐるのである。だから“C'est l'abondance avec cherté qui est opulence.”中の abundance は最大量に非る相當に大なる量を表し、opulence は價值の最大を意味してゐるわけで、兩者の間に即ち物質としての富の量と價值又は純生産物の間に並行の量的關係は認められてゐない。これ私がランドリー代議士の主張に自家撞著があると云ふ所以である。

(註一) P. Moride, Le produit net des physiocrates et la plus-value de Karl Marx, p. 17.—“Nous croyons qu'il faut au contraire suivre l'opinion de M. Deschamps, et dire que les physiocrates, en parlant de productivité songent à une productivité en valeurs.”

(註二) R. Savatier, La théorie du commerce chez les physiocrates, pp. 69 et suiv.

(註三) Landry, l'article cité, p. 54.

ランドリー代議士の説明がかく徹底を缺いてゐるとしたら、ケネーの人口理論を如何に解釋すべきであるか。此解釋の困難に當面して我々は寧ろ退いて、純生産物を物質と解するか、又は物質と價值との二面を具へたものと解釋すべきであるか。それを物質と解釋するときには、先に述べて置いたような便利な點があるのみでなく、またケネーが人口の富に對する影響を餘り大きく見てゐなかつた事實もよく説明せられ得るようである。純生産物が價值であるとする、人口によりて發生せしめらるゝ物財の需要は直接に價值餘剰を増加せねばならないのであつて、人口こそ價值餘剰、即ち富を作り出すものでなければならぬ。けれども此處に注意せねばならぬのは、ケネーが人口の増加を直ちに需要の増加と解してゐなかつたと思はるゝ事實である。ケネーの思想の根底には賃銀は人々間の競争によつて下落すると云ふ思想がある。故にケネーに於ては人口の増加は必ずしも需要の増加を意味しない。ケネーが或場合に消費者と消費とを區別し、消費が價格に及ぼす影響を述べながら、消費者の價格に對する影響を認めなかつたのは此思想に基くのである。"Au lieu de dire 'plus il y a de consommateurs', il faut dire 'plus il y a de consommation': car les consommateurs ne manquent nulle part, c'est la consommation qui manque; si vous faites naître de nouvelles productions, si vous multipliez les productions consommables, alors y ayant plus de productions à

consommer, il y aura une plus grande consommation; quant aux consommateurs, là où il y aura une plus grande quantité de productions à consommer, ils ne manqueront pas de se multiplier.” (註)

(註) Quesnay, Oeuvres, p. 393.

私の解釋は極めて簡單である。價額の餘剰は人口の増加に必要な物財を購ひ入るゝを可能ならしむると同時に、他方此餘剰の増加は生産を刺激し、物財の増加を生ぜしめ、此らが相俟つて人口を増加せしむることゝなるのである。ポピラシヨニストたりしとは云ひ、貨幣と富とを殆んど同一に見たるメルカンチリストにも、此ケネーと同じ思想があり得たと思はれる。メルカンチリストが貨幣と富とを同一に近しと見たるは、貨幣が人間の生活に必要なあらゆる物財を購ふに役立ち得ると考へたからである。富を價格の合計と見てゐたケネーに於て、私がこゝに極めて簡單に解釋するような人口理論が存在するは、毫も怪しむに足りない。

三

右に解説したことから、ケネーのうちからも尙メルカンチリスト的見解が根本的に取り去られてゐないことが明になつたと思ふ。

ソーベール・デュルダン教授は云ふ、「一國の富は、それが含む商品の豊富と價格とに比例する。これがケネーが繰り返し繰り返し表明せる思想である。然し此思想は貨幣が國々に分配せらるゝ態様に關し、即ち對外貿易の理論の中心問題に就て奇怪なる觀念を含む。げにや農業生産物が豊富ならば、その價格が高いことが一國に於て如何にしてあり得ようか。之を許容するには貨幣自身が多いと考へねばならぬ。故にかゝる立場はメルカンチリスト的である。彼は自らの思想に論理的に押しつめられて、明なるメルカンチリスト的宣言をなしたわけである」と。(註)私はかような意味に於てケネーがメルカンチリスト的であつたと云ふには躊躇する。私はたゞ、ケネーが富を價值の合計の餘剰と見た點にのみメルカンチリスト的思想の殘がいを示したと考ふるのみである。

(註) Sauvatre-Jourdan, Isaac de Bacalan et les idées libre échangistes en France, p. 24.

私は此富を増加するがためにのみケネーの自由貿易主義は考へられたものであると思ふ。ケネーの自由貿易主義は富即ち純生産物——農業生産物の價格の下落を防ぎ、農業の純収入を最大ならしむる目的を以て考へられたもの以外の何ものでもない。トルシー教授が云つたように、ケネーの自由貿易主義は「一國の一般的繁榮の根基である所の農業の繁榮を保證するためには實行せねばならぬ最良の政策として事實上から證明せられてゐる實踐的原則である。」(註)何故に私はかく云ふか。

Grains にも、Hommes にも、將たまた Impôts にも自然權に據りて自由主義、自由貿易主義が主張せられてゐる所は一ヶ所もないからである。

(註) Truchy, Le libéralisme économique dans les oeuvres de Quesnay, Revue d'économie Politique, 1899, pp. 927-8.

然るにデユボア教授は、ケネーが一七四七年に公にせる *Essai sur l'économie animale* のうちに既に自然權の思想を見出して、之を重要な證據の一としてケネーの自由主義、自由貿易主義を先驗的なりとする。(註一) 逝ける Depitre はデユボア教授の説とトルシー教授らの説とを折衷せしめ得ると信ずる。「ひとり農業のみが新なる價值を生産すと主張する事實其こと自體が、之に先つ所の一つの經濟哲學を豫想する。此經濟哲學は自然秩序——人間の幸福となるよう神が欲して作れる自然的物理的法則の總體——への信仰と同じことなのである。ケネーは先づ此らの法則を發見した。農業のみが新しい社會的價值を生産すると云ふことが自然法則によつて定められてゐるのである。國の富の最大は純生産物の最大によつてしか得られないと云ふのも、また自然法則を豫想してゐる。」(註二)

(註一) Dubois, Quesnay anti-mercantiliste et libre-échangiste, Revue d'économie politique, 1904, p. 224 en note.

(註二) Depitre, Introduction à l'Exportation et l'importation des grains, p. XX.

Dubois の説も Depitue の説も共に甚だ巧妙なる解釋ではある。然しもしケネーが既に一七四七年に自然權の思想を懷いて居り、これが彼の思想の全體を支配してゐたとするならば先驗的自由主義に矛盾するが如き思想はケネーのうちに現れ得ない筈である。然るに既にチルゴーが指摘し、トルシー教授が證明したように、ケネーのうちには自由主義と相容れないような思想が可成り多數に現はれてゐるのである。私はそれらのうち主なる二つだけをあげる。先づ第一に當時のリベラリストが目的とした最大のもは労働の自由なのであるが、ケネーは殆んど此問題に觸れてゐない。ラフォン及びソールベール・デュルダン教授は此點を明快に指摘してゐる。「ケネー及びファイデオクラットの自由主義は農業を保護し隆盛ならしめ、純生産物を増加する手段にしか過ぎなかつた。そしてそれは他の社會階級の繁榮を間接に保證しようとする手段に過ぎなかつた。ケネーらが、工業上の特權や職人組合の廢止運動に關し第一線に立たなかつたのは、此理由によつて説明が出来る。此問題は間接にしか彼らの興味をひかなかつた。何よりも農業が彼らの心を捕へたのであつた。」(註一)

「此時代に自由主義の標的の最も大なるもの、一つであつた所の職人組合の問題に就て、ケネーは殆んど關心する所がなかつた。」(註二)

(註一) Lafont, Les idées économiques de Turgot, p. 174.

ケネーの發展——アグリアニスムより自由へ

（註二） Sauvaire-Jourdan, op. cit., pp. 25—6 en note.

第二に利子制限の問題に就てケネーの自由主義は徹底してゐない。ケネーによると利子は土地の純生産物に基礎を有つてゐる。借手は借り入れた資金を以て土地の所有權を得、之に依つて純収入を得らるゝが故に、利子を支拂ふことが出来る。だから利子は純収入のうちから支拂はれる。而して或土地を購入せる場合に、これから得らるゝ純生産物は任意に變化し得らるべきものではない。それは農業生産の自然法則によつて制限を受けてゐる。故に利子又は永久地代の形成のために投ぜられた貨幣からの収入は純生産物の額を超えてはならない。然るに自然に放任せらるゝ場合には、利子は往々にして此限界を超越するものである。「なぜかと故に不幸なる時代には借手の數は貸手の數を著しく越ゆるものである。利子は極端な高さにまで昇つて行く。地代は土地の収入の總てを吸収して仕舞ふ。土地の耕作は次第に衰へる。借手の欲求は愈々迫つて來る。収入が減れば減ずるほど、利子は際限なく昇つて行く。地主は土地を抵當とし、資産を失つて行く。地代の唯一の根源である土地は次第に瘠せて、荒蕪に歸して行く。」（註二）そこで自由主義を破りて、ケネーは利子率を土地の収入に比例せしむべきシステムを設けねばならぬと云ふ。先づ王は法律によつて、貸手が越ゆることの出來ぬ利子率の限界を定めねばならぬ。第二に判官が利子率を定めねばならぬ。第三

に各主要都市の公證人が定期に例へば十年毎に土地の價格と收入との最も普通なる比例を公にせねばならない。(註二)ペリローはケネーの此利子制限論を先驗的自由主義の破壊と考へない。“Quoi qu'il en soit, nous voyons que sur cette matière de l'intérêt de l'argent, la base des idées du maître est toujours le principe de la productivité exclusive de la terre ; cette dernière seule peut produire un revenu; celui que donnent les capitaux en monnaie est un revenu factice qui n'a avec la premier qu'un rapport de conformité. C'est précisément dans ce rapport de conformité que notre auteur trouve à la fois le fondement en justice de l'intérêt, et la justification raisonnable de la limitation de son taux.”(註三)だが自然秩序が人爲的干渉を必要としなかつたなら、人爲的利子制限の手段が須ひらるゝことなく、利子は常に純生産物のうちに定めらるゝ筈であらう。矛盾の存在は争ひ難

5。

(註一) Quesnay, Oeuvres, p. 405.

(註二) Ibid., p. 403.

(註三) Perillaud, La liberté économique dans Quesnay, p. 113.

四

これで、ケネーに於ける自由主義、自由貿易主義が先驗的ではなくして、アグラリアニスムの進展であることは充分なる證據を與へられた。私は最後に彼の哲學が感覺主義に近いものであるのを確め、彼がプラグマチックな自由主義をとれることの不可能にあらざるを證明する。

一般にケネーの哲學はラシヨナリズムであると云はれ、マルブランシユの哲學の影響を受けたと云はるのであるが、彼の哲學思想を一般的に表明してゐる論文 *Evidence* によると、彼の哲學は *Vision en Dieu* と廣がりの概念の生得性を主張するマルブランシユの哲學とは全く相異してゐる。彼の哲學は殆んど全く感覺の上に礎かれてゐるのである。彼によると「感覺には感官的感覚と表象的感覚との二種類があるが、此ら二種類の感覚が我々の總ての感覚・感情・思想・自然的自明的知識を形成する。」(註一) 表象的感覚も實は感官的感覚の集團及び結合に過ぎない。例へば空間又は廣がりの概念は視覚と觸覺の結合によつて生ずる。判斷及び普遍的抽象的概念を發生せしむるものも又感覺である。普遍的抽象的概念は個別的感覚中の個別的性質が忘却せられて、個別的感覚が貧弱となれるものである。それは理性から出しものではなく、「此ら抽象的普遍概念を精神に生ぜしむるものは、精神の不完全性又は精神の能力の限られてゐることなのである。」(註二) 判斷も感覺中に含まれる。「蓋し判斷するとは物の關係、量、性質、存在の方法等を認識することに他ならないの

であるが、此らの屬性は物の表象的感覚の一部に過ぎないからである。」例へば一本の大なる棒と一本の小なる棒とを見ることそれ自體のうちに、一方の棒は他方の棒よりより大であると云ふ判断を含んでゐる。「故に判断を生ぜしむるものは感覚それ自身であることは明白である。總ての理解と統覺は感ずる者の純粹に受働的なる作用に過ぎない。肯定、否定が我々の精神の働きてあるかの如く見ゆるは、傳統的スコラ哲學の論理より出でし謬想に基くのである。」(註三)

(註一) Quesnay, Oeuvres, pp. 761—7.

(註二) Ibid., p. 778.

(註三) Ibid., p. 770.

かくてケネーに於ては知識の全内容は感覚によつて與へられてゐる。記憶と、感覚を我々のうちに生ぜしむる興味によつて發生せしめられた概念の結合とが、各個人のうちに種々なる展開をなして、諸相を呈してゐるのである。感覚は先づ受働的主體、即ち感ずる者の存在を把握せしめ、次に物を表すべき感覺的性質の仲介によつて物の存在を把握せしめる。だから最高の原因 *La Cause Suprême* の探求に導くものは畢竟するに感覚に他ならない。「運動によつて我々の感覚を生ぜしむるものは、それ自ら運動にもあらず、また運動の原因でもないから、物は我々の感覺の原本的原因

たることが出来ぬ。蓋し物が我々の感覺の條件的原因たるは運動によりてに他ならなかつたからである。」（註）此考を徹底すれば精神は感覺によつて充さるべき空虚なる結構でなければならぬが、ケネーはその感覺主義を貫くことなく、精神は一の實在であると云つてゐる。此點に就てのケネーの所説は可成り正確を缺いてゐるが、彼に於ける精神はほゞ意志に等しく、感覺の結果である所の理性ではないようである。此意志は撰擇に先行する思慮となつて現はれるのだと云ふ。而してケネーによると、此意志を除けば人間は他の動物と何等異なる所はないのである。「予は予自らのうちに認むる感覺の作用の總てを獸類のうちに認む。」即ち彼によれば人間の意志を除くならば、人間を支配する法則も動物を支配する法則も同一の自然法則なのである。

（註） Quesnay, Oeuvres, p. 789.

私はケネーのうちに合理主義の片影だも認め得ないとは云はない。だがそれは感覺主義であつた所の思想の贅澤なるマントに過ぎない。私はアリックス教授と共にケネー哲學が其根底に於て感覺主義であつたと考へる。「A la bien analyser, l'aur. philosophie [des physiocrates] est, au fond, un sensualisme utilitariste.” “Nous serions tenté de dire, de notre côté, que la métaphysique cartésienne de la théorie de l'ordre n'est qu'un ample et somptueux manteau jeté sur une doctrine, au fond

toute positive et empirique.” (註) 感覺主義は常に懷疑主義かプラグマチスムに結び付く。ケネーのプラグマチックな自由主義、自由貿易主義が彼の哲學と結び付き得る所以はこゝにあると思はれる。

(註) Allix, Le physicisme des physiocrates, Rev. d'économie politique, 1911, p. 586.

